



第58回 十字軍の時代①

1 十字軍の背景

・11世紀、ローマ教皇の権威が増大するなかで、イスラーム教徒を攻撃するキリスト教徒の軍隊が結成された。これを（ ）という。

(1)11世紀以降、西ヨーロッパの気候が温暖となっていた。

→（ ）・鉄製農具・（ ）・水車の導入・開放耕地制の普及など農業技術の向上により、農業生産（食料生産）が飛躍的に増大した。

→（ ）が劇的に増加し、土地不足となっていた。

→土地を求めて、西ヨーロッパは外に向かって拡大する傾向があった。

(例1) 12～13世紀に、フランスの（ ）を中心に、森林を切り開く（ ）が行われた。

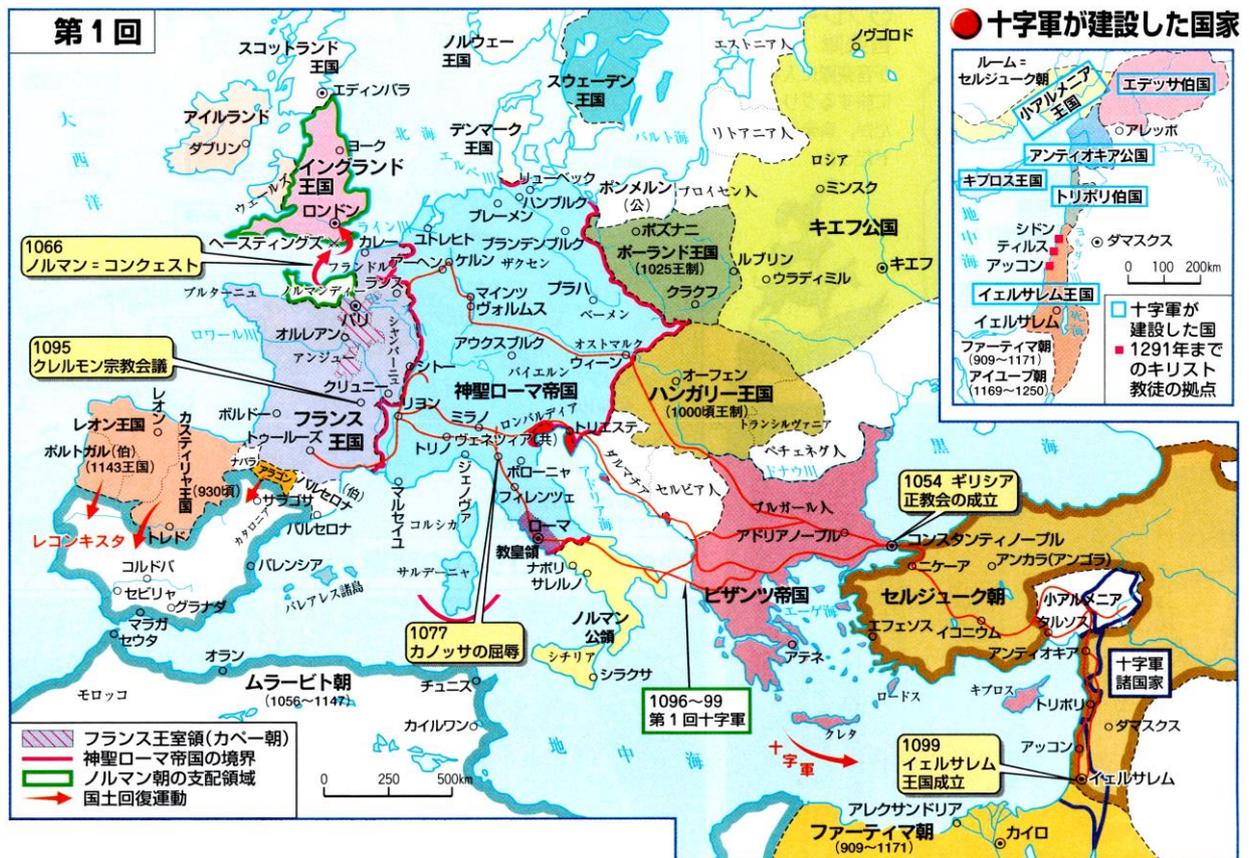
また、オランダの干拓やアルプス高地の開墾も進められた。

(例2) 12～14世紀に、（ ）を中心に、エルベ川以東で土地を獲得する（ ）が行われた。

(例3) イベリア半島では、（ ）、（ ）、（ ）などのキリスト教国によって、イスラーム教勢力から領土を取り戻す運動、いわゆる（ ）が行われた。

(2)ローマ教皇の権威が高まったことや、修道院によるカトリックの布教で、キリスト教の聖地へ（ ）することが流行していた。

※ローマ、イエルサレム、サンティアゴ=デ=コンポステーラが三大巡礼地とされた。



2 十字軍の結成

- 11 世紀、トルコ系のイスラーム王朝である（ ）は、アナトリア半島（小アジア）に進出して、（ ）を圧迫していた。
→さらに聖地（ ）をも支配下に置いていた。

- ビザンツ帝国は、仲の悪かったローマ教皇（ ）に救援要請した。
→1095 年、教皇はフランス中南部で（ ）を開催した。
→（ ）の結成が提唱され、聖地イェルサレムの奪回が宣言された。



現在のイェルサレム

イェルサレムはたしかに聖地であるが、決してキリスト教だけの聖地ではない。イスラーム教、ユダヤ教の聖地でもあることを忘れてはいけない。



教皇ウルバヌス2世

聖地奪回が大義名分とされたが、実際はローマ教会(カトリック)がギリシア正教会を併合して、キリスト教を統一することを狙っていたとされる。



クレルモン宗教会議

教会会議と言われる場合もある。ウルバヌス2世は、「十字軍に参加すれば罪が許されて天国に行ける!」と演説した。

<第1回十字軍>

- 1096 年、熱狂した 10 数万人の民衆と数千人の騎士は、略奪と虐殺を行いながら聖地イェルサレムに向かった。
→十字軍は、分裂状態であったイスラーム勢力を破り、イェルサレムを征服した。
→占領地に（ ）などの十字軍国家を建設した。

<第2回十字軍>

- 神聖ローマ皇帝とフランス王がシリアを攻撃したが失敗した。

<第3回十字軍>

- 12 世紀、エジプトとシリアに（ ）を建国した（ ）は、1187 年に聖地イェルサレムを奪還した。



十字軍による虐殺

十字軍は、イスラーム教徒はもちろん、ユダヤ教徒やギリシア正教徒まで虐殺した。殺すだけでなく、食べてしまったこともあった。



サラフ=アッディーン

民族的にはクルド人である。虐殺を繰り返した十字軍とは対象的に、無用な殺生は一切しなかった。敵の十字軍からも尊敬を集めていた。



映画『キングダム・オブ・ヘヴン』

この時代を舞台にした映画で、イェルサレム攻防戦は非常に迫力がある。オーランド=ブルームが主演で、サラディンも登場する。

- 神聖ローマ皇帝（ ）、イギリス王（ ）、フランス王（ ）が連合して第3回十字軍が結成された。
→しかし事故や仲たがいで、サラディンの抵抗によりあえなく失敗した。



皇帝フリードリヒ1世

シュタウフェン朝の神聖ローマ皇帝で、髭が赤いため、赤髭王(バルバロッサ)と呼ばれた。あまりに突然の死だったため、死因にはいろんな説がある。



イギリス王リチャード1世

立派な体格に端正な顔立ち。戦争も強く、ライオンハートと呼ばれた。ただし頭はパッパラパーである。ちなみに弟はさらにパッパラパーである。



フランス王フィリップ2世

こちらはブサイクでハゲで短足であった。しかし頭は抜群によく、それまで弱かったフランスの王権を、強化することに成功した。第63回と合わせて。